わが妻うつくし

―うたびとの妻の記録―

山田野理夫

秋元書房刊

著者紹介

大正11年生まれ。
東北大学文学部卒。
主なる著書
「アルプスの民話」
「南部牛追唄」(小説)
「函館」(小説)
「魯迅伝」他
現住所
東京都北多摩郡狛江町和泉511の18

わが妻うつくし
—うたびとの妻の記録—

定価 280円

昭和43年5月20日 印刷
昭和43年5月25日 発行

著者 山田野理夫
発行者 秋元英子
発行所 株式会社 秋元書房
東京都新宿区赤城下町42番地
郵便番号 162
電話(268)0758・7637
振替東京27047

乱丁・落丁のものは，本社またはお買いもとめの書店にてお取りかえします

組版 西田整版・印刷 三秀社・製本 共成社
© 1968 Printed in Japan

わが妻うつくし

―うたびとの妻の記録―

山田野理夫

秋元書房刊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

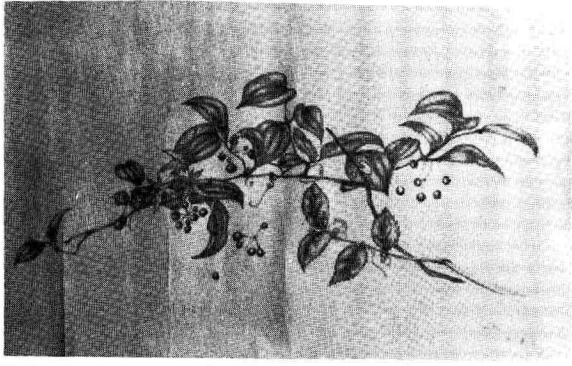
わが妻うつくし

山田野理夫

↑昭和33年4月八木重吉の詩碑が、重吉の生家の前に建てられた。登美は自分で「素朴な琴」を選定した。　本文 164頁参照

このあかるさのなかへ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美しさに耐へかねて
琴はしづかに鳴りいだすだらう

秋元書房刊



→八木重吉が鎌倉師範学校一年生の時書いた絵。

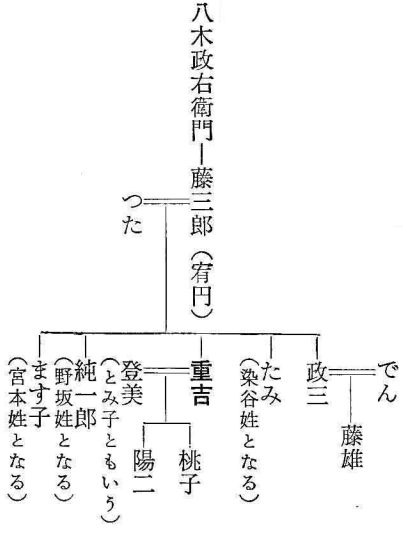
←重吉が入院して死んだ茅ヶ崎の病院南湖院。

→吉野秀雄と登美。昭和二十三年頃。

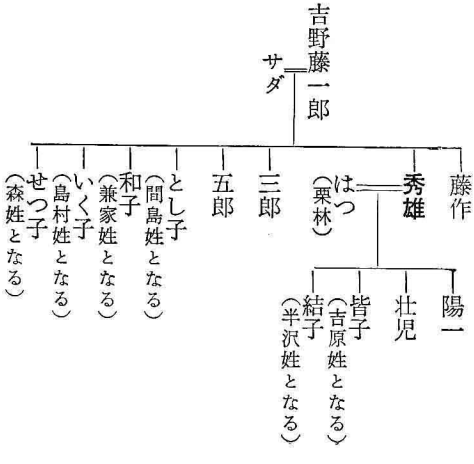
目次

その一　ふるさとの山　9
その二　わが妻うつくし　28
その三　このさびしさを誰れに　53
その四　父のかなしみ　76
その五　明日が何になろう　95
その六　別れ　114
その七　母と子　124
その八　ふたりの妻　135
その九　歌びとの心　155
その十　妻よ　171
あとがき　185

八木家の人たち



吉野家の人たち



その一　ふるさとの山

島田登美が八木重吉の下宿をたずねたのは大正十年二月のことである。登美は和服に海老茶の袴をつけ、草いろの風呂敷包みをかかえていた。元越後高田榊原藩中の家柄であったが、兄慶治は麻布で蒔絵職人をしていた。そこをたよって四年前上京して来た。間もなく池袋の姉文枝の家に身を寄せた。滝野川の女子聖学院に入学するためである。登美は雪国生まれらしく色白で小柄である。おさげ髪がよく似合う女である。登美は明治三十八年二月四日生まれである。父助作は信州の人、島田家に養子となった日本画家である。

学院の前の文房具屋のおかみさんが風呂の帰り、下駄のはなおを切らせ困っていたことがある。そのとき登美が通りかかりハンカチをひきさいてすげてやった。おかみさんがお礼をいうと、登美はだまって頭をさげて去っていったという。それはまるで聖女のようでしたよ、と語った。

登美は病弱で、休学することになった。からだが回復期にむかうと、高女部三年級の編入試験を受けようと思ったのである。そこで遅れを取りもどすために、家庭教師がほしかった。英語と数学である。

登美の姉がいいひとを知っているといって、人を介してだがと、八木重吉をたずねるようにすすめた。姉の家から百メートルほどの近さである。昼過ぎというので登美は早昼をすませていった。重吉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

は部屋をきちんと片づけて待っていてくれた。重吉もまた色白の小柄な青年である。登美は部屋の片隅にある描きかけの油絵に目をとめた。つちいろの中に白いみちが描かれていた。暗いなかに不思議な明るさがある。重吉は、

「絵はお好きですか」といった。

「よくわかりません」といって、登美は微笑した。

「お話をうかがっていました。休学されておられたそうですね」といい、「わたしも三ヵ月の病院暮らしをしたことがあるのですよ」といった。

登美は重吉の下宿に一週間ほど通って教わった。重吉はさとすような口調である。英語を読む口調は、はなし言葉と違って美しかった。

音楽の先生になられてもいい方だ、と登美はそのときそう思ったが、後年、このことを八木重吉に話をすると、重吉は、

「小学校から音痴で、体操と音楽は丙だよ。そんなことをあのとき面とむかっていわれたら、わたしはその場から逃げだしただろう」

といった。

登美は幸いに編入試験が通った。

姉のすすめで、お礼にとたずねていったとき重吉は、

「それは好かったですね。わたしなぞの手助けがなくとも通ったでしょう」

と微笑をうかべていった。口もとの陰が美しい。

玄関先まで送って来た重吉は、

「こんどのことは島田さんのおちからですよ。わたしは近くこの下宿を引き払ってしまいます。いず

れ改めてこちらから申し上げましょう」といった。
登美はその意味がわからず、うなずいただけである。わかっているのは重吉一人である。
重吉が生まれたのは明治三十一年二月九日である。東京府南多摩郡相原大戸の八木家は八木島屋という屋号の小地主である。山林二十町歩、田畑二町歩で山は家の背からつづいている。家の前には町田街道の白いみちが通っている。街道に沿うように境川が銀の帯を流している。そのむこうは田畑の広がりである。
重吉の父は藤三郎といい、かたくなな性格のひとである。晩年は仏道を信じ、自から宥円と号していた。母つたは境川をへだてた小林家から嫁に来た。芝居好きで、村芝居がかかると観にゆき、義太夫のひとふしをよくくちずさんでいた。記憶のいい女でさわりをすぐ覚えた。つたの母も川尻村の加藤家から小林家へ来たひとである。つたは政三、たみ、重吉、純一郎、ます子の五人の子を生んだ。重吉は非常におとなしい、やや憂鬱な少年として人びとの印象にある。
重吉の家には周さんとよばれる作男が同居していた。周さんは父藤三郎と幼な友達であったが、白痴で、これをあわれと藤三郎は引き取ったのである。
重吉はこの周さんに親しみを感じていた。周さんが山仕事で山に入ると、重吉もそのあとを追っていた。周さんもわからぬ言葉で重吉をいたわっていた。周さんは字が読めない。絵本の説明を母からきいた重吉は、それを周さんにしてやった。
重吉が遊びにいって夕暮れになってももどらぬと周さんは気の狂ったようにさがし回った。ある秋、重吉と純一郎は境川に沿って虫を追っていった。川の岸辺で石ひろいをしていると日が落ちた。道にまよったこともしらずにいた。周さんはいく度も門口にでて二人の帰りを待った。手伝女に、なぜおれのいない間に、家をだしたと叱りつけていた。周さんは走り出して、遊び仲間の家をたずねて、

重がきてないか、と問うた。
遠い城山が紫色に変わった。町田街道の白さもくろずんできた。周さんはその街道に立って、重、純と呼んだ。
重吉と純一郎がもどって来た。周さんは二人をどなるように叱った。周さんのまぶたはふくれあがり涙が落ちた。
津久井湖畔に桜並木がつづいている。重吉はその桜をスケッチして来て周さんに見せた。周さんは、いろがついているといいなあといった。
重吉が鎌倉師範学校へ入学すると、周さんは重吉の荷物を背負い駅まで送っていった。夏休みで帰る日には早朝から駅で待ちつづけていた。
重吉は周さんに、山の神さま、太陽もお天とうの神さまとすべてを神さまとよぶことを教えられた。純一郎の回想談である。周さんの素朴な神である。
母つたが夕飼の食卓に豆腐にそえて生ねぎを薬味としたことがある。その生ねぎは畑から掘り起こしたばかりで下肥の臭いが残っていた。藤三郎の父政右衛門は箸をとるなり、
「この薬味の臭いはどうしたのだ。水洗いをしたのか」
と叱責した。藤三郎も、
「つた、おまえにも似ないじゃないか、下女の手前もあるからしっかりしないか」
と口をはさんだ。
政三、たみ、重吉、純一郎の子ども達は、この成り行きをあやぶみつつ見ていた。
「薬味の役目をする生ねぎがかえって豆腐をまずくするな。それにこのきざみかたはどうだ。もう一ぺん畑からひき抜いて来い」政右衛門はすこぶる不機嫌である。

つたはだまって夕食の膳を離れて納戸(なんど)に立っていった。たみがそっとのぞくと身回り品を風呂敷につつんで表へでていった。

「母さんがいってしまうぞ」とたみは大声で叫んだ。政右衛門はうつむいていた。

「重ちゃん、ひきとめにいけ」

政三が命じた。

「そうだ。重ちゃんがいい」

他の子ども達も口をそろえた。藤三郎は苦笑(にがわら)いをして、「重、ゆけ」といった。

重吉は箸を棄ててつたの後を追った。土橋の所で追いついた。

「やっぱり重ちゃんがきたのね」

つたは後もどりしながら、重吉が追手となることを予期したようにいった。

ふるさとの川よ
ふるさとの川よ
よい音をたててながれているだろう
(母上のしろい足をひたすこともあるだろう)

(ふるさとの川)

重吉が、夕暮れ畑からあがり川で足を洗う母の姿をうたったものである。

ゆうぐれ
瞳(ひとみ)をひらけば

ふるさとの母うえもまた
とおくみひとみをひらきたまいて
かわゆきものよといいたもうここちするなり

（母の瞳）

けしきが
あかるくなってきた
母をつれて
てくてくあるきたくなった
母はきっと
重吉よ重吉よといくどでもはなしかけるだろう

（母をおもう）

政三が八王子の織染学校に入った。八木家の長男なので織染で身をたてるためではない。中学教育を受けるには便宜だったからである。毎日町へ通うので、子ども達は、何かと政三に用事を頼んだし、政三も図工が必須の一つなので画集なども持つようになった。重吉はそれを借り受けては、模写した。出来ると周さんに見せた。

重吉は政三の持っている植物図鑑に興味を抱き、裏の山で採集するまでになった。周さんに採ってきた草花と図鑑を比較しながら話をすると、周さんは、同じものでも、このような絵の花は枯れることがないなと重吉の顔をのぞいた。

重吉の家からすぐ近くに大戸の氏神八雲社がある。急な石段を登りつめるとその社があるのだ。この石段を登ったり降りたりすることもこの辺の子どもの遊びの一つである。重吉が足をすべらして落

ちたことがある。掌が血だらけになったが重吉は歯をくいしばってそれにたえていた。ちいさなからだがふるえていたという。

八雲社の祭は八月一日の御神楽からはじまるといっていい。大戸ばやしといわれるものである。重吉はかすりのゆかたをつたに着せてもらい団扇をもってでかけていった。しんこ細工の屋台の前で、手とはさみでつくりあげられてゆく細工ものをよく見ていた。猫の細工物を買求めてきて戸棚の上に載せておいて、そのまま忘れてしまい、かびが生え、つたに叱られたりした。

祭が終わると八雲社はさびしくなる。重吉は終わってしまっても遊びにいった。

ふるさとの山をむねにうつし
ゆうぐれをたのしむ

（ふるさとの山）

日がひかりはじめたとき
森のなかをみていたらば
森の中に祭のように人をすいよせるものをかんじた

（森）

心のくらい日に
ふるさとは祭のようにあかるんでおもわれる

（故　郷）

重吉の遊び相手の一人に徳重がいる。重吉といとこである。

ある夏のことである。重吉が酒買いにいこうとすると、徳重も一緒にいくといった。二人はそれぞ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co